

# 末黒野

すぐろの

5月号 (通巻873号)



# 春 愉 し

春浅しひかりとなりて野の流れ  
相模武蔵分かつ隧道冴返る  
春の鳥礫となりてひかりけり  
栄螺焼くたちまち厨海となり  
尉と姥肩寄せ合へり雛売場  
湧きてすぐ春の水とし流れけり  
春の潮満ちて近うす安房上総  
春愉し清女曙蘇軾宵

松本  
三千夫  
(名譽主宰)

# 落の臺

いかのぼり切れたる後の幾山河  
笛を吹く少女高らか四温晴  
豆撒や鬼へ五才の好奇心  
ゆかりなき人とベンチに梅日和  
下萌や歳月刻む寺の門  
ほつほつと大地の鼓動落の臺  
明るさの日矢の中行く二月かな  
濁点のまめなる文や春灯  
まつさきに仔牛誕生牧の春  
谷戸の日の影あたたかき日なりけり  
海鳥のすずる鳴きせる干潟かな  
日のありてこそその紅梅東慶寺

黒滝志麻子

(主宰)

# 跳箱

日溜りの籬に忙し寒雀  
時間割のあるごと鳥来四温晴  
鉢花を並ぶる菓舗や春隣  
羊腸の上り下りや梅探る  
節分や飲み屋に鬼の待ち構へ  
立春の思はぬ風に目覚めたり  
鯉の影はつかに揺れぬ薄氷  
金縷梅や作業小屋より鋸の音  
薄氷を割れば一氣に迂る水  
篁は風のたまり場春寒し  
父の背を跳箱に子ら園うらら  
細枝の連音符めく木の芽かな

森

清

(副主筆)

堯

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 春隣

森清信子

霜柱踏みて故郷引き寄せぬ  
墨染に暮るる山峡雪もよひ  
妖怪の話せがむ子雪しんしん  
やはらかき冬日や母の膝頭  
かすれたる文の書出し冬籠  
自販機の熱き茶ごとん空つ風  
寒禽や池に瘦せたる杭の数  
幸せは退屈と母糸編む  
湯上りの桃色の稚春隣  
俎に広がる野の香三葉芹

## 送辞

安斎久英



若駒のひづめ刻めり渚道  
逃げ水や過去は未来の糧とせん  
沖波のそれより著き春の雲  
春立つや白きタンカー入港す  
水温む汀に深き轍跡  
てのひらに包みてみたき春の雲  
藤房の大揺れつづき日暮れけり  
山藤の風に素直の香立ちかな  
風去りて藤房しばし落ちつかず  
卒業や曾孫の送辞の朗朗と

## 霜の声

石黒興平

控所の白木造りや初祓  
枯野ゆく逃げ足早き己が影  
命あるものに優しく冬の雨  
短命の父系母系や霜柱  
難聴の身にもしんしん霜の声  
沖待ちの檣灯ほのと凍てにけり  
紙漉や己たてたる波鎮め  
大寒や機械に払ふ診療費  
菰を透く淡き日待み寒牡丹  
昂ぶれる水音春の知らせとも

---

## 冬銀河

岡野里子

枯蓮や古武士めきたる鷺一羽  
大空の紺紙金泥冬銀河  
山宮の古き石垣冬堇  
寒垢離の僧の一喝水飛沫  
旗雲に覗く富岳や寒夕焼  
薄氷を突くやひと日の動き出し  
天神の絵馬整然と冴返る  
鎌倉の小路静かや白椿  
梅真自幣新しき絵筆塚  
針箱を閉ぢて久しや針供養

# 紅梅

田中臥石

枯葎煮干の匂ふいさば徑  
冬の日の海へ傾く煮干の簀  
海の音鎮めてよべの雪明かり  
振り返り見る夕さりの雪椿  
雪を噛む轍の音や梅真白  
帰りしな娘手渡す分葱束  
けふ妻の検診日なり分葱饅  
紅梅を観むと遅るる八十路坂  
観梅の山や上総の土気城址  
雨水とや風邪を引いたる寒暖差



# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）



木の葉髪 及川照子

寒林や日の斑踏みゆく靴の音  
白樺の凍つる倒木梓川  
ラジカセの昭和の調べ木の葉髪  
冬ばらの孤高を保つ真紅かな  
舟音を聞きて揺らぐや糸柳  
青年の夢はうたかた実朝忌  
春灯を波に浮かべて港町

寒明 今村千年

針供養 岡田史女

菊坂の一葉旧居三十三才  
東雲の城址散策浮寝鳥  
町医者の見立ては加齢薬喰  
耳遠きことは幸せ北塞ぐ  
留守の間の机辺片付く寒さかな  
潮騒も潮の色も寒明くる  
虚子句碑も横笛庵も梅のなか

割れば黄身二つの卵春立てり  
鐘楼は普請半ばや春ならひ  
測量の糸の張られて露の臺  
三椏のほころび初むる宮居かな  
梅東風や崑の筆塚絵筆塚  
玉垣を風吹き抜くる針供養  
春の雪抛無き旅に出て



身の上話

小田嶋野笛

月冴ゆる

菅野日出子

喜寿の息吹きかけ磨く初鏡  
熱爛や二軒目のママ姉に似て  
初耳の身の上話薩摩汁  
しばれたる耳よ眼よ郷里棄て  
凍雲の緩りと西へ鬼房忌  
大寒の鴉の騒ぎ鎮まらず  
爪の色今朝は健やか寒卵

古民家

加藤静江

古民家の固き三和土や寒土用  
古民家の水屋に宿る寒さかな  
古民家の和らかき日や瀬戸火鉢  
九割を凍らせたるも滝死なず  
白菜や自転車の子の席に乗せ  
初大師の梵字しろがね光かな  
鬮鶏の砂ける歩み里日和

茶室への飛石に散る竜の玉  
多摩川の蛇行をしかと枯河原  
初読や開くも稀な大字典  
リコーダーの響くベランダ月冴ゆる  
冬帽や盆栽売の饒舌に  
待ちわぶる雨や春立つあかしたも  
浅春のせせらぎせせる小鷺かな

立春

斉藤マキ子

ぶつけ合ふ男言葉や牡蠣割女  
底冷えやなかなか開かぬ壇の蓋  
權音も景色の一つ春立ちぬ  
和鉄の小さき鈴の音針供養  
切株の赤き年輪凍てゆるむ  
何にでも別にと応へ受験生  
ジーンズのはちきれさうや合格子

寒土用 堺 昌子

梅が香や参道長き善光寺  
墨絵めく夕照の富士寒土用  
ふる里を恋しく思ふ成木責  
冬鴟の長湯となれる露天風呂  
ゆきあひの空あかあかと冬夕焼  
チューリップのはや芽吹きたる日和かな  
遅咲きの庭の老梅加賀の白

春立つ 高木邦雄

日脚伸ぶ厚き歳時記繙きて  
二合半の酒のつまみや年の豆  
侮れば纏はり解かぬ風邪の神  
猫熟寝四温の縁の日溜りに  
大空へ拳突きあぐ合格子  
天つ日の力増したり春立つ日  
禅林や塔影淡き春の月



# 青炎集

## 黒滝志麻子選

悪しきこと皆うそとせり初天神

横浜 岡美智子

潮風や三浦大根しわ深め

初稻荷おどけ狸の窯の里

おはやうの声のぬくもり寒の朝

街中のせせらぎきらと冬ぬくし

日溜りの集ひかしまし寒はずめ

横浜 長尾タイ

どんど火の勢ひを誘ひ時つ風

横浜 神谷さうび

飾り焚く美しき火の粉の乱舞かな

どんど火の果てて再び波の音

黄の深し雲厚き日の黄水仙

風に乗る白梅の香の漂へり

仰ぎ見て近寄り愛づる梅の花

横浜 是松三雄

マスクして声なき会釈交はしけり

冬夕焼マグマめきたる雲の縁

傾ぶきて屋根より低き冬北斗

ふぐ刺や透けて青磁の皿の竜

春めくや頷き歩く二羽の鳩

またひとつ夕日を溜めて椿落つ

四温晴れ捨つるに惜しきハイヒール

横浜 饗庭恵子

朝まだきはや晩年の息白し

白もまた燃ゆる色なり寒椿

明け方の刻すら凍つる厨かな

暗香のいつもの足音梅月夜

黄水仙波は光を巻き込みて

客殿の庭の静寂や牡丹の芽

横 浜 田 ナ オ ミ

紅を濃く眉を際立て冬帽式子

窓際を占むる孫子や冬麗

冬帽を目深に夫とすれ違ふ

老犬に歩み合はせて冬日和

早梅の咲き揃ひたる曾我の里

菜の花の棄つるに惜しき一人膳

横 浜 今 野 明 子

枯菊のくれなゐ一つ密やかに

白髪のちらりと見ゆる冬帽子

散る波の尖りて光る寒の海

日溜りに降りて見廻す寒雀

保育園を出づる親子や寒ぼたん

受験子を預りて日々やはらかき

横 浜 小 林 清 子

武蔵野や地蔵揃ひの毛糸帽

ねぎみそとツナマヨにぎり夕炬燵

窓の日に悔み状書く寒の明け

春立つやなき炬煙舎を捜す癖

草餅やオペラのちらしレジ横に

ひなぎくの鉢植買ふや水しとど

横 浜 山 咲 和 雄

髪を切ることも一つの年用意

湯の宿や一夜に変へる雪景色

我に住む心の鬼へ豆を撒く

春炬燵ともに長寿の二人かな

歩きつつ熟語つぶやき受験生

これからの人生大事鳥雲に

横 浜 谷 貝 美 世

古民家や障子明りの展示品

千両や茅屋根高き文庫蔵

山裾の軍鶏の関上ぐ寒日和

木の芽吹く公衆電話取り壊し

春立つや白内障のもや晴れて

春めくや木々の騒めく湖に

横 浜 鈴 木 友 子

七ツ星のきはだつ光寒の入り

探梅の言葉交はしぬ女坂

佐保姫の眠り起こしぬ谷の川

末黒野や永久の絆の広ごりて

一休み庭へ十五羽鳥帰る

八ツ橋や小流れぬうて芹育ち

# 耕 土 集

森清 堯選



やはらかき日さしの窓辺福寿草

白菜を割きたる音の白さかな

雪空になりゆく雲の重さかな

追伸の一行温し姉の文字

淡き日をまとひまとひて梅一輪

横浜 吉原ひろ子

横浜 岩崎 藍

明日生きる為の点滴梅一輪

推敲にあがく春暁句に溺れ

坂道をエスコートされ日脚伸ぶ

春たねと鸚鵡返しや庭古りて

ほろ酔ひの別れのハグや春浅し

寒林の間に遠音の波濤かな

寒干両祈りの跡の墓の前

春夕焼男の肌の艶めけり

朝市のさあ持つてけと桜鯛

のどけしや階段を這ふ襦袢の子

浦安 東 正則

横浜 秋山 文子

冬うらら幼の眠る父の胸

燃えたてる冬の落暉やビルの窓

枝に刺す果実や寒禽今朝も来て

小流のリズム軽やか福寿草

カーテンの透くる模様や春景色

大白鳥一声湖へ仲間入り

語部のなまり親しも暖炉燃ゆ

そと払ひ押絵羽子板納めけり

メサイアの余音をひきて春立ちぬ

春節や龍くねりゆく中華街

横浜 平野 秀子

横浜 滝口 洋子

陽光に屋根の雪庇の耐へてをり

雪の帽のひと枝每や杉木立

氷面鏡赤きひとひら封じ込め

風花の思はせ振りやビルの街

芙蓉峰夕日に浮かび睦月尽

# 八朔の香

小川 玉泉

(名誉顧問)

隣との地境今に水仙花  
枯蓮田奏づる風の音止まず  
巢繕ふ燕旧家の深庇  
春光を眩しむ稚を高々と  
香川県産の八朔香の豊か  
花数の十余や鉢の白椿

雑記帳 22

俳句の世界に身を置いて、四十余年になる。  
誌友の方々から頂いた計り知れないご指導ご鞭  
撻には、唯唯御礼申し上げるばかりである。知  
るは易く行うは難しを守って行きたいと思う。